

グラングリーン大阪全景イメージ 提供：グラングリーン大阪開発事業者(記事内イメージ図および図すべて)

先行まちびらきまであと約1年！ グラングリーン大阪

“都心に残された最後の一等地”といわれた「うめきた(大阪駅北地区)」。その1期区域に「グランフロント大阪」が誕生したのが2013年4月。今年、まちびらきから10年の節目を迎えた同施設のすぐ隣の2期区域では今も工事が進む――。

それは、来年夏ごろの先行まちびらきを控え徐々にその姿が見えてきた、うめきた2期地区開発事業「グラングリーン大阪」。約9haの広大な敷地に、オフィスやホテル、商業施設などのほか約4.5haの都市公園が整備される。

今号では、「グラングリーン大阪」の概要に加え、当会が特に力を入れて関係者と連携・協力して進めている、イノベーションを創出する仕掛けづくりについて紹介する。

うめきた2期開発のあゆみ

グラングリーン大阪 誕生まで

今春、1期区域である「グランフロント大阪」のまちびらきから10年の節目を迎えた「うめきた」。来年2024年の夏ごろには、新たに「グラングリーン大阪」の先行まちびらきが予定されており、現在も各種工事が進められている。

2期区域である「グラングリーン大阪」の計画は、グランフロント大阪の開発と並行して進められた。2008年には、「大阪駅北地区まちづくり推進協議会」内に設けられ、当会も参画していた「大阪駅北地区2期開発ビジョン企画委員会」においてまちづくりに関する検討が開始され、翌2009年には「大阪駅北地区2期開発ビジョン」が策定された。その後、2013年に実施された民間提案募集



工事状況(2023年6月時点) 提供：グラングリーン大阪開発事業者

の優秀提案をふまえ、2015年には「うめきた2期区域まちづくりの方針」が決定した。方針では、全体で約8haの「みどり」を確保することや、新産業創出、国際集客・交流、知的人材育成に資する中核機能を設けてイノベーション創出につなげることなどが盛り込まれ、「みどりとイノベーションの融合拠点」がまちづくりの目標として掲げられた。

その後、都市再生機構が行った開発事業者募集により、2018年、三菱地所を代表企業とする9社グループが選定され、2020年に着工した。現在は、コンセプトである「“Osaka MIDORI LIFE”の創造」を実現すべく、「みどりと融合した生命力と活力あふれる都市空間」づくりが進められている。本年2月には、当該区域のプロジェクト名称「グラングリーン大阪(GRAND GREEN OSAKA)」と、そのロゴマークが決定した。2024年の夏ごろに先行まちびらき、2027年度に全体まちびらきが予定されている。

大阪駅(うめきたエリア)の開業とその効果

2期区域の基盤整備としては、都市再生機構による土地区画整理事業および都市公園事業(防災街区公園整備事業)のほか、大阪市と西日本旅客鉄道(JR西日本)の共同事業として、2015年よりJR東海道線支線の連続立体交差事業(地下化)と新駅設置事業が実施されている。同事業に伴い、JR東海道支線はグランフロント大阪とグラングリーン大阪の間を通過するルートに変更されると

ともに、グラングリーン大阪の南西端に大阪駅(うめきたエリア)地下ホームが設置され、本年3月に開業した。

同駅には、デジタル技術を活用したインタラクティブ空間のほか、世界初導入となるデジタル可変案内サインやフルスクリーンホームドアをはじめ、グラングリーン大阪の玄関口にふさわしい技術が取り入れられている。また、これまで大阪駅を経由していなかった特急「はるか」や「くろしお」が停車するようになることで、関西国際空港や和歌山への所要時間が大幅に短縮され、関西各地からのアクセスも大きく改善する。

また、市街地を分断していた踏切等の施設が地下化により撤去されることから、周辺地域に開発効果がよりスムーズに波及し、都市の活性化が進むことも期待されている。加えて、JR大阪駅とJR難波駅および南海本線の新今宮駅をつなぐ「なにわ筋線」が2031年の開業をめざし整備中であるほか、阪急電鉄十三駅方面からの接続も検討されており、交通結節点としてのうめきたの役割はさらに高まっていく。

どんなまちになる？ グラングリーン大阪

グラングリーン大阪は街区の中心に整備された広大な都市公園を挟み、北街区は新産業創出の拠点、南街区は国際交流の拠点となるよう都市機能が配置される(P.4図)。各都市機能には最先端の仕組みや技術の導入が検討されている。



主な都市機能

都市公園・みどり



「(仮称)うめきた公園」イメージ

大規模ターミナル駅直結の都市公園としては世界最大級の規模となる約4.5haの「(仮称)うめきた公園」は大阪駅に直結し、オフィス・中核機能などを有する民間宅地とシームレスにつながる。「市民・来街者のQOL(生活の質)向上」や「企業・研究機関などによるイノベーション創出」を実現するサステナブルな都心型パブリックスペースが公民連携により整備される。

さらに、まちづくりの目標である「みどりとイノベーションの融合拠点」を実現するため、南北の都市公園や西口広場と一体となった大規模な緑化空間が設けられ、民間宅地を含め約8haの「み

どり」が創出される。また、都市公園内にはイノベーションに資するさまざまなタイプの施設が建設され、「みどり」と「イノベーション」の融合を促す。主な施設は次のとおり。

(仮称)ネクストイノベーションミュージアム

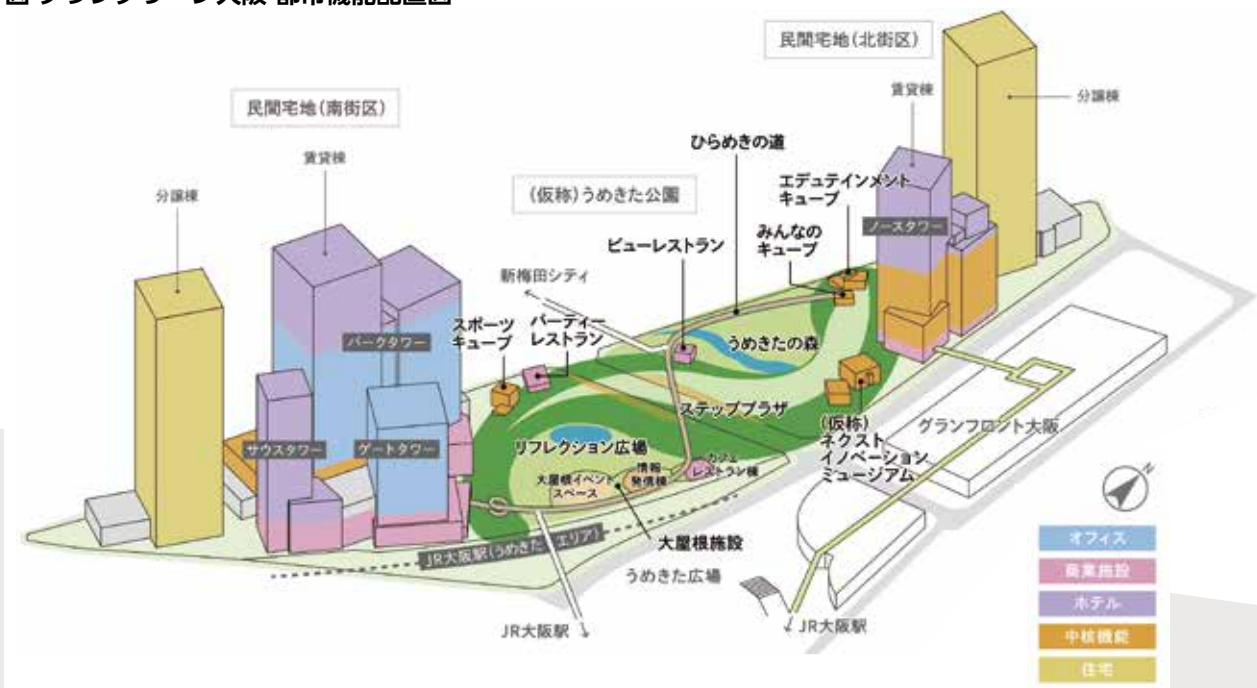
新しい製品・技術、サービス、アートなどの「モノ」や、イベントやプログラム等の「コト」に触れられる新しい形態のミュージアム。

大屋根施設 情報発信棟

都市公園やまちの総合的な情報発信・案内機能のほか、サステナブルなライフスタイルに触れることができる企画スペース、多目的ギャラリーで構成。イノベーション創出に寄与する機能等を有する公園施設の整備と中核機能を連携させた施設運営をめざす。

また、都市公園・みどりの運営形態としては、パークマネジメントとエリアマネジメントを一体的に行うことで調整が進められている。都市公園および民間宅地内の「みどり」に多彩なイベント等を誘致してにぎわいを創出するほか、グランフロント大阪のエリアマネジメント組織「一般社団法人グランフロント大阪TMO」との連携、さらにはうめ

図 グラングリーン大阪 都市機能配置図



きた地区全体での一体的なエリアマネジメントをめざして周辺の関係者と協議・連携が行われる。

オフィス

南街区賃貸棟に総面積約34,000坪の大規模なオフィスが整備され、パークタワー4階のオフィ斯拉ウンジには、ダイニングや緑を感じながらリフレッシュできるテラスなどが設けられる。また、多様な働き方をサポートするため、子育て支援施設が整備される。

商業施設

アジア初上陸の食と文化を体験できる大型フードマーケット「Time Out Market Osaka」を中心に飲食店、ショップ、天然温泉・プール・ジムが併設される都市型スパ等の営業が予定されている。

グランフロント大阪の北館とデッキで連結される北街区では、豊かなライフスタイルを提案するショップも展開。さまざまな体験型プログラムが提供される。

ホテル

スーパーラグジュアリーホテル、イノベーション拠点に集うクリエイティブな人々をいざなうライフスタイルホテル、ビジネスからレジャーまで幅広く利用できるアップスケールホテルと、カテゴリーの違う3つのホテルが営業を予定している。

中核機能

イノベーションの創出拠点となることをめざすグラングリーン大阪にとって肝となる都市機能。情報・人・技術が集まる関西のハブとして、産学官と市民が一体となって共創するスペースを実現する。北街区には、4層吹き抜けの交流スペースを囲むように、国などのイノベーション支援機関の入居を想定したオフィス、プラットフォーム施設(会議室・講義室等)、コワーキングスペースやSOHO、交流スペースなどを有したイノベーション施設が設置される。グランフロント大阪の知的創造拠点「ナレッジキャピタル」などとも連



中核機能が置かれる北街区賃貸棟イメージ

携しながら、新たなライフデザイン・イノベーションの創出をめざす。

中核機能の構築に関しては、施設の管理・運営を担う「コ・クリエーションジェネレーター (CCG)」とイノベーション創出に向けたソフト事業の実施を担当する「うめきた未来イノベーション機構 (U-FINO)」(P.6参照)が昨年9月に設立されており、両組織が連携して、検討・準備を進めている。

次世代のまちづくりのモデルに

新技術の活用により環境負荷を低減

地域冷暖房システムの導入、自然エネルギーの活用、エネルギーマネジメント等によりCO₂排出削減をめざす。また、コージェネレーションシステムの活用や、地下水を多く含む地層(帯水層)から熱エネルギーを採り出し、建物の冷房・暖房を効率的に行う技術「帯水層蓄熱」等により、ピーク電力の削減をはかる。加えて、水資源循環や生物多様性に配慮した取り組みも進め、まち全体として積極的にSDGsに貢献していく。

大規模災害を想定したエリア防災性能を確保

巨大地震による津波対策として、建物の機能を維持できるよう、重要設備機械室を中間階や屋上に設置するほか、耐震性に優れた中圧ガスによるコージェネレーションシステムや72時間分の備蓄燃料による非常用発電機の自立分散型電力の導入を予定。また、地震・火災等の大規模災害に備え、都市公園・民間宅地・西口広場で合わせて約6haの一時的な避難場所が確保される。



グラングリーン大阪の まちづくりに 積極的にかかわる関経連

グラングリーン大阪について、当会ではまちづくりの構想段階から積極的にかかわってきた。特に、イノベーションの創出に寄与する機能については、その必要性和具体的な成果が出る仕掛けの重要性を強く訴えてきた。2017年6月には、機能設計などの検討や、実証研究・イベント等先行的な取り組みを行うため、当会の専務理事を代表とする「うめきた2期みどりとイノベーションの融合拠点形成推進協議会」を都市再生機構、大商、大阪府・市、大阪科学技術センターとともに設立。先行まちびらきが近づいてきた2022年9月には、準備をさらに加速させるため、後継組織として法人格を持つ「一般社団法人うめきた未来イノベーション機構(U-FINO)」を発足させた。U-FINOの理事および監事には当会役員が就任したほか、職員1名を出向させるなど、当会もその運営に深くかかわり、当会事業との連携をはかっている。

2023年2月には、“うめきた楽市・楽座～イノベーションで拓く関西の未来～”をスローガンに3日間にわたりU-FINOの設立記念イベントが開催された。イベントでは、大企業・大学・支援機関等のオープンイノベーション部門の窓口が「出店」のように集い、アイデアや課題を持つスタートアップ等と面談を行う「うめきた響合の場」



「うめきた響合の場」を視察する松本会長

(共催：関経連)のほか、大学・研究機関による体験型展示が行われた「イノベーションストリームKANSAI 6.0」や、国内外から招いた有識者がヘルスケア・エコシステムについて議論した「Medtech Connect Osaka 2023」等、多数の機関が実施するプログラムが展開された。最終日に開催された「設立記念シンポジウム」には当会の松本正義会長も登壇し、U-FINOへの期待とともにこれからも当会が協力していくとの決意を述べた。

このほか、U-FINOでは今後の活動への反映をめざし、神戸のビジネス交流拠点「アンカー神戸」や、京都リサーチパークなどで「出前講演会」を開催するなど、各地の行政や起業家との意見交換に取り組んでいる。

「オープンイノベーション交流の場形成」「グローバル事業展開・コミュニティ形成」「イノベーション人材育成」などを事業の柱に掲げるU-FINOでは、今後も社会課題の解決や新産業創出に向け、情報・人・技術などをうめきたに集め、新しい製品・サービスやビジネスが生まれるエコシステムを構築し、大阪・関西におけるイノベーション創出を推進するべくさまざまな活動が進められる。

グラングリーン大阪は、2022年に大阪市が区域指定された「スーパーシティ(スーパーシティ型国家戦略特別区域)」において、2025年大阪・関西万博の会場となる夢洲とともに、データ連携基盤を活用し、規制改革を伴う先端的なサービスを実現していく地区として位置づけられており、そのメリットも十分に生かしたまちづくりを考えていかなければならない。

先行まちびらきまであと約1年。イノベーションはもとより観光など幅広い分野において今後の関西の成長を担う重要な拠点としてグラングリーン大阪が発展し続けられるよう、当会では引き続きU-FINOをはじめとする関係各所と連携し、取り組みを展開していく。

(産業部 望月太朗・植村元栄・山下善寛)